

ひととキも

vol.
11
Dec
2014



特集

エコツーリズム / 環境教育

人とキも



寧陝県寨溝村での田植え体験（2014年6月）

トキの里で自然体験

プロジェクトでは、2013年春からエコツーリズムと環境教育を兼ねた親子の自然体験プログラムを寧陝県寨溝村などで継続しています。

中国の学校では遠足や林間学校等の校外活動はほとんど実施されておらず、都会では自然や農村のくらしに触れたことがない子どもが増えています。こうした中で、もっと子どもに自然に触れさせ、体験させる必要があると考える父兄も増加しており、受け皿となる民間団体の活動も徐々に広がってきています。

こうした中でプロジェクトのミニブログウェイボをきっかけに、西安で親子のアウトドア活動を運営している民間団体「開拓者戸外探索学校」（以下 NPO）との交流が始まり、協力して自然体験プ

ログラムを進めることになりました。

具体的な活動は2013年4月からはじまり、これまでに寧陝県寨溝村、洋草バ村などで表のようなプログラムを実施、計11回、延べ約310人が参加しました。

体験プログラムはNPOが主催し、経費は基本的に参加料で充当していますが、一部のプログラムについては、バス借上げ費、スタッフ日当等をプロジェクトが支援しています。参加費は一人当たり200～300元程度、宿泊は基本的にテントを張っての野営ですが、農家に分宿することもあります。

参加者の募集は、実施1～2週間前にNPOが会員に計画を通知し、参加を募ります。参加数はプログラムや季節、天

候によりますが、稲刈りや田植え等は人気が高く、すぐに定員に達する状況です。子どもは全員小学生以下で、中学生以上はいません。父兄は大卒以上の高学歴者が多く、半数以上がリピーターです。

プログラムの内容は、里山歩き、トキ観察、お絵書き、ゴミ拾い、稲刈り、田植えなど様々で、季節や日程に合わせてテーマを設定しています。指導は主にNPOが行いますが、プロジェクトのスタッフも絵本読み聞かせ等でサポートし、林業局の職員がトキの解説する場面もありました。

当初は里山歩き、トキ観察、ゴミ拾いといった単発の比較的取り組みやすい活動から始まりましたが、回を重ねるに

実施された自然体験プログラム

実施時期	場所	活動内容	日程	参加数
2013年4月5日(清明節)	寧陝県寨溝村	里山歩き、トキ学習・観察	日帰り	親子17組36人
2013年8月17-18日	洋県草バ村など	梨もぎ、歴史的街並み参観	1泊(民宿)	親子3組6人
2013年9月20日	寧陝県寨溝村	稲刈り体験	1泊(野営)	親子など約40人
2013年11月16日	寧陝県寨溝村	ゴミ拾い、トキのお絵かき	日帰り	9人
2013年12月6日	寧陝県寨溝村	田んぼ回復(除草・鋤起こし)	日帰り	小学生・教師など35人
2014年4月6・7日	洋県草バ村など	トキ飼養場、梨園参観など	1泊(民宿・野営)	親子10組など計29人
2014年5月26-30日	寧陝県朱家嘴村	畔づくり、代掻き、田植え	2泊(農家分泊)×2回	小学生・教師など約10人×2回
2014年6月1・2日(端午節)	寧陝県寨溝村・朱家嘴村	田植え、粽づくり 伝統行事(陸ペーロン競争)	1泊(野営)	親子など約60人
2014年7月26・27日	寧陝県寨溝村	田んぼの草取り	1泊(民宿)	親子など8人
2014年8月16・17日	洋県草バ村など	トキ飼養場、梨狩り	1泊(民宿・野営)	親子7組など計17名
2014年10月2・3日	寧陝県寨溝村	稲刈り体験、トキ観察など	1泊(民宿・野営)	親子20組など計50名

つれて地元との関係も深まり、現在、寧陝県寨溝村では一年間を通じた継続プログラムとして、無農薬の米作りに取り組んでいます。

対象地はトキ野生復帰基地の下にある旧水田で、耕作放棄から5年ほど経過し、ヨシや灌木の侵入が進んでいました。トキのために湿地の回復が望ましく、またNPOも無農薬の米作りに取り組むフィールドを捜していたことから、管理者である県林業局と協議し、当分の間、田んぼを利用できることになりました。

復活作業は昨年暮れから開始、牛を使った鋤起こしや代掻きなどの作業を体験プログラムとして実施、手におえないところは業者や地元農家に依頼しま

した。

5月下旬、平行して修復を進めていた野生復帰基地の給水路が完成、ケージの余水を田んぼに引き入れ、6月初めの端午節の連休に田植え体験プログラムを実施しました。西安から来た約60名の親子が約2時間、泥んこになりながら取り組み、計2ムー(田んぼ3枚、約0.13ha)に苗を植付けました。7月末には草刈り体験プログラム、秋には稲刈りを実施しました。

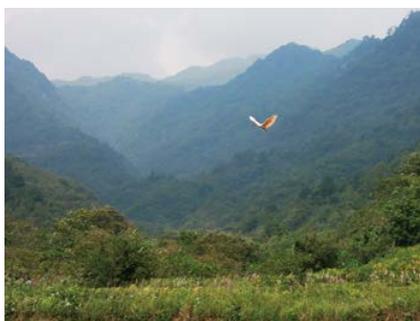
寨溝村での体験プログラムでは、食事の提供、田植えや稲刈り等の作業指導、日常の水田管理等を村民の協力で実施しており、これらの報酬や参加者への特産品販売などで、新たな収入の機会が生まれています。今後、さらに交流

が深まれば、合作社が進めている無農薬米などの製品の販売拡大につながることも期待されます。

また、都会の親子が何回も訪れ、農村の自然や暮らしを体験し楽しんで帰っていく様子は、村の人たちが地域を見直すきっかけにもなると思われます。

現状の体験プログラムはまだまだ発展途上です。今は体験中心の素朴な活動の段階ですが、今後、自然観察等の充実、指導手法の多様化、安全管理等を強化していく必要があります。今後、活動経験を踏まえたメニューブックの作成等に取り組んでいきたいと考えています。

右：寧陝県寨溝村での稲刈り体験(2013年9月)
下：稲刈り体験中に飛来したトキ



2013年12月6日、西安華徳福小学校の生徒と先生の計30人余りが寧陝県寨溝村にて田んぼ復活活動を行いました。活動の主催は「開拓者戸外探索学校」で、プロジェクトは西安から寧陝県への交通費を支援し、寧陝県林業局の田毅均副主任も活動に参加しました。

朝8時に西安を出発し、11時頃寧陝県に到着。地元の農家で昼食を食べたあと、寨溝トキ放鳥基地に近い田んぼに入り、草を刈り取ったり、力を合わせて鍬で土を起こしたりと、みんなで協力

しながら取り組みました。農民の指導のもと、農家から借りてきた牛で耕す様子にも興味津津。鋤を引く牛の負担を減らすため、多くの子どもが一生懸命草を取ったりしていました。1時間半をかけ、荒れていた1ムー（約6.7アール）ほどの田んぼがきれいに整いました。数羽の野生トキが近くを飛び、まるで子どもたちへ感謝しているかのようにその明るい鳴き声が空に響きます。

今回復活した田んぼを拠点として、劉

氏は来年の苗作りや田植え、収穫などの農業体験活動を行っていきたくと話しました。子ども達が自然を楽しむ機会を与えると同時に環境の改善を目指します。トキにとって大切な生息環境である田んぼの復活は、トキ保護にとっても重要なことに違いありません。

文：庄苗苗



2013年12月6日
田んぼ復活活動

2013年11月16日

寨溝村クリーンアップ活動

2013年11月16日、「開拓者戸外探索学校」との共催で、西安の親子団体を連れて、寨溝トキ基地でエコツアーを実施しました。今回の活動の内容はゴミ拾い・トキ観察です。子どもに身近なことや小さいことから環境を守るべきだということを認識してもらうのが目的です。

朝8時頃西安を出発し、約3時間で寧陝県へ到着。寨溝村の黄村長宅で昼食を食べた後、みんなでゴミ袋を持ってトキ基地へ続く道を歩きました。ゴミを拾いながら、植物の生態を勉強したりしていました。ゴミを拾った後、ケージの外でトキを観察しているとき、野生トキ3羽が次々とケージの近くに戻ってきました。野生トキの美しい姿に皆がとても喜んでいました。その後、暖かい光に浴びながら、子どもたちがトキの絵や切り紙に挑戦。天気にも恵まれ、寨溝村でのんびりとした一日を過ごすことができました。

文：庄苗苗



2013年9月25日

寧陝小学校

トキ野生復帰基地見学

上：草を取ったり土を起こしたりする子どもたち
中：牛の力も借りながら耕された田んぼ
下：活動に参加した華徳福小学校の生徒と職員



上：活動に参加した親子
下：黄村長宅の庭先で昼食



9月25日の午後、寧陝小学校の生徒26名と先生5名が乗った一台の中型バスが寨溝村に到着しました。赤い服に黄色い帽子の生徒たちは画板などを持って次々とバスを降り、先生とともに基地へ向かって歩き始めました。

村の入り口からトキ野生復帰基地までの約2.7kmの道は、両側に棚田が続き、遠くには青々とした山並みが連なっています。初めて訪れた生徒の目には何でも新鮮に映ったようで、「これは何の花?」「これはどんな草?」「この虫は何?」「トキはどこにいるの?」などの質問が絶えず、引率の先生が生徒たちの質問に一つずつ丁寧に答えました。景色を眺めながら歩く生徒たちの前には、空を飛んでいるトキ、田んぼで餌を採つ

ているトキ、木の上で休んでいるトキも次々と現れました。

基地に到着してからは「中国朱鷺」と書かれた記念碑の前で記念写真を取り、先生や基地の職員からトキの生態や特徴、観察の注意事項を聞いた後、ケージで飼育されているトキを静かに観察しました。生徒たちはトキについていろいろと疑問を持っているようでしたが、幸いなことに、トキについての論文を執筆するため基地に滞在していた、陝西師範大学の大学院生霍志萍さんにも解説をお願いし、質疑応答の時間を持つことができました。次々と手を挙げてトキの質問を繰り出す生徒たちに、霍さんも丁寧に答えていました。

文：田寧朝





2014年8月17-18日

洋県有機梨狩りツアー

真夏の陽射しが照りつける8月中旬、洋県草バ村は梨の収穫期を迎えます。

草バ村はトキが住みついですでに20年以上、民家のすぐ近くにトキの巣やねぐらがあり、村民にとってトキは家族のような存在です。

村の特産は梨、村民の重要な現金収入源です。しかし農業や化学肥料を使用しないので病虫害の被害を受けやすく、また、品質向上が課題でした。村の梨の安全性はトキが保証してくれます。それに高品質が備われば、草バの梨はブランド品になり得るポテンシャルを持っています。

このため、プロジェクトでは2011年以来、技術研修や資材の提供等で有機梨づくりを支援してきました。モデル農家を選定し、漢中市の植物研究所の専門家が定期的に農家の梨園を訪れ、栽培管理の指導を行ってきたところ。

収穫された梨はほとんど地元で販売されていますが、大都市ではより有利な価格が期待できます。そのきっかけ

づくりとして、西安からの梨狩りツアーに取り組むことにしました。

ツアーは昨年に引き続き2回目です。今年は3月末に梨花ツアーを開催、その後も梨の実の成長をプロジェクトの微博で随時紹介し、宣伝を進めてきました。

ツアーは8月16~17日の週末に実施、西安から親子のグループ17名が参加しました。募集・運営は自然体験活動で連携している西安のNPOです。初日は洋県の古い町並みやトキ飼養場を参観、野生トキも観察。翌日午前、草バ村のモデル梨園に到着し、農家や研究所の専門家から摘み方の指導を受けながら、親子で梨狩りを楽しみました。今年の梨は春の長雨と夏の日照りの影響を受けて大きさは200g前後と小さ目でしたが、柔らかくてジューシー、糖度も高いと好評でした。

約2時間ほどで参加者が摘み取った梨は合わせて約170kg、7元/kgで買い取られました。摘み取った梨は、プロ



試食しながらの梨狩り



ツアーに参加した親子と漢中植物研究所の専門家

ジェクト提供のトキの紙袋に入れて、各家族がそれぞれ持ち帰りました。

また、今回のツアーとは別に、西安の有機食品販売会社のバイヤーが会員とともにモデル園を訪れ、合わせて約2.5トンの梨を購入しました。価格は同じく7元/kgです。

今回のツアーやバイヤーが購入の7元/kgは、村合作社買取価格よりかなり高く、手間をかけて良い品質の梨を生産すれば高値で売れることを実際に示すことができました。農民の考え方も、数量第一から品質が大事という方向に変わりつつあります。

NPOやバイヤーは来年も草バの梨を購入する意向で、販売量の拡大も期待されます。そのためにはしっかりした品質確保が何より重要です。残されたプロジェクト期間においては、モデル農家の主体的、自立的な取組みの促進に重点を置いて取り組んでいきたいと考えています。

2013年11月27-28日 洋県黄安鎮中心小学

「トキ保護・環境保全」絵画コンクール



洋県黄安鎮中心小学では、漢中トキ自然保護区とプロジェクトの共催により、2013年11月に「トキ保護・環境保全」をテーマにした絵画コンクールを実施しました。今回のコンクールでは一等賞2名、二等賞3名、三等賞5名のほか、JICA 特別賞1名、優秀指導教師5名を設定し、11月27日に活動表彰式を行いました。保護区の路晋さん、李佳さん、プロジェクトの平野専門家と小池さん、庄が学校に出向き、作品の中からJICA 特別賞を審査しました。その後の表彰式では、受賞者に賞状と賞品を手渡し、学校にはトキの絵本と版画を寄付しました。

翌日には、入賞した生徒を対象に洋県トキ飼養場とトキ宣伝館の見学がセットされました。宣伝館を見学した後は、プロジェクトの小池さんからトキの絵本の読み聞かせを実施しました。保護区

の路晋からもトキの知識を教わりました。さらに、トキ飼養場では解説を聞きながら飼育されているトキを観察しました。太陽にあたって飛んでいるトキの美しい姿に皆がとても感動しました。最後に行われたのはトキクイズです。生徒達は積極的に参加し、トキを守り環境を保全するという決意を示していました。

この洋県黄安鎮中心小学は生徒数が多く、こうした活動の洋県におけるモデルとなる学校です。この学校で環境教育活動を実施することができたのは、とても有意義であったといえます。保護区とプロジェクト、そして小学校とも協力しながら、引き続き様々な活動を通してトキ保護、環境保全の理念を宣伝して、よりよい効果を目指していきたいと考えています。

文：庄苗苗



小学校で行われたコンクールの表彰式



小池さんによるトキの絵本の読み聞かせ

水田復活の取り組み

6月初め、緑の山並みに囲まれた寧陝県朱家嘴村、小堰地区では溪流から水を引く水路が復活し、数年ぶりの田植えが始まりました。

同村は寧陝県の県城から西に約3km、堰坪河の南岸に位置し、山がちな寧陝県では数少ない水田地帯です。この地域は米が主食で農家が一番望んでいるのは米作りですが、11年前の水害で用水路が破損し、トウモロコシなど畑作への切り替えを余儀なくされてきました。農家は水路の修復を念願してきたのですが、資金不足等から実現されないまま、もともとあった160ムー（約10.7ha）の水田は、2013年には20ムーあまりまで減少していました。

朱家嘴村はトキの重要な生息地です。寧陝県では2007年から計5回の放鳥が実施され野生のトキが定着していますが、朱家嘴村は巣が3カ所、ねぐらが2カ所、常時16羽のトキが観察され（2014年繁殖期前）、県内では最大の生息地になっています。朱家嘴村の水田を回復することは、寧陝県の野生トキの保護にとっても大きな意味があります。

県林業局を通してプロジェクトに水路修復の要望が寄せられたのは2013年の春、その後1年かけて県林業局、村当局と必要性や効果、村の実施体制を検討し、3月に役割分担などの確認書を取りかわし、4月上旬工事に着手しました。

工事は2カ所の取水堰を再建し500~600mの用水路2本を復旧するもので、プロジェクトが石材やセメント等の資材を現物で提供、その他の経費は村が負担し、村民も奉仕労働で参加しました。村民の意欲は非常に高く、工事は順調に進み、約1カ月で切石作りのしっかりした水路が完成、5月下旬に通水がはじまりました。

工事が進むにつれて、小堰地区のあちこちで田んぼの鋤起しが始まり、通水を待ちかねたように田植えが開始されました。7月末現在、小堰地区では計12ムー（約0.8ha）の水田が回復し、緑の棚田が復活しつつあります。今年は準備が間に合わなかった農家もあり、来年はより多くの水田の復活が期待されます。

県林業局の最新の発表によると2014年春の寧陝県の野生トキの繁殖は10ペア、巣立ち成功が24羽、過去6年間で最も繁殖が良好な年ということで、朱家嘴村での水田回復は、寧陝県のトキにとってもタイムリーな取り組みになりました。

プロジェクトではこれまで、このような水利施設の復旧・整備事業を洋県、寧陝県の合わせて6地区で実施してきました。いずれもトキが生息する山や丘陵に囲まれた村で、水路やため池の荒廃により水田の畑地化や耕作放棄が進行していました。荒廃の直接の原因は大雨等の災害ですが、出稼ぎで青壮年がいなくなり、村民の共同作業による補修が難しくなっている現状も背景にあります。

プロジェクトの事業により、これまで合せて約200ムー（約13.3ha）の水田が回復し、農家からは感謝の声が寄せられています。農民のトキ保護事業への支持も深まりました。

しかし、トキ生息地全体のなかで、回復できた水田はごく一部です。多くの水田を復活させるには、やはり村に若い人が戻り活力を取り戻すことが第一です。水路整備を実施した寧陝県寨溝村では、地元の合作社が農民と契約して無農薬米を栽培し、都市の消費者向けに販売する取り組みを進めています。また、洋県では有機認証を取得した地元企業がビジネスとして、トキ米の生産・販売に取り組んでおり、各地で農家との契約栽培を進めています。このような取り組みを通じて、農村が活性化し水田復活が一層進むことを期待しています。



トウモロコシ畑に変わった棚田 (2013年8月)



通水が始まった水路 (2014年5月)



2014 年度訪日研修

2014年8月18日から24日まで1週間の日程で今年度の訪日研修を実施しました。目的は、日本のトキ保護の現状の理解とトキとの共存に向けた地域の取り組みを学ぶことです。

研修参加者は、プロジェクト実施地区の自然保護区管理局、県政府の幹部、陝西省、河南省林業庁の幹部及び北京の国家林業局幹部等、計10名で、このほかプロジェクトから専門家とアシスタントの2名が随行しました。

実施にあたっては、環境省や佐渡市、石川県等の行政や研究機関、NPOの皆さんの多大のご協力頂きました。この場をお借りして御礼申し上げます。

トキ野生復帰

東京では、環境省自然環境局塚本局長を表敬訪問、竹内専門官からは日本のトキ野生復帰の全体状況が紹介されました。塚本局長は「日中トキ交流は末長く続く。トキが中国と日本を往来する日が来るのが夢。」と語っておられました。

佐渡では広野自然保護官から野生復帰の経緯や現状について説明頂いたあと、生息地を参観しました。ねぐらの林では、夕暮れの空に三々五々帰ってくるトキの群れに遭遇し、洋島の研修員は「トキが会いにきてくれた!」と感激していました。

石川県では浜田環境部長を表敬訪問、里山里海の取り組みについて紹介頂きました。また、いしかわ動物園では美馬館長の案内で分散飼育中のトキを参観しました。

トキ共生

東京では、国学院大学の久保田教授に農家と消費者の提携、いきもの認証などオルタナティブな有機認証を軸に、日本の有機農業の取り組み状況をレクチャーしていただきました。

佐渡では市が進めているトキ認証米や冬季湛水、トキの公開展示等の施策が生物多様性推進室の甲斐室長から紹介され、会場ではトキのクレープの実演も提供されました。「保護だけではうまくいかない。」という甲斐室長のコメントは研修員にインパクトを与えたようです。

トキと共生する米作りに関しては、農家の立場から取り組みを進めているNPOの佐々木氏の案内で水田脇のビオトープ「江」を参観しました。研修員たちは、タニシやカエル、ドジョウなど田んぼの生きものの豊かさを実感すると同時に、価格設定の難しさなど佐々木氏の農家としての体験談に、有機産業に取り組んでいる洋県政府の研修員も大きくうなずいていました。

エコツーリズム

研修の最終日程は能登半島春蘭の里での農家民宿。田舎の普段の暮らしの中に家族の一員としてお客様を受け入れるとい



- ① 塚本自然環境局長表敬
- ② 甲斐室長から佐渡市のトキ共生政策について講義
- ③ 水田魚道の視察
- ④ 水田ビオトープの視察

う独自のアプローチが好評を得て、農家の収入増を実現、里山活用の成功例として注目されています。

春蘭の里事務局長の多田氏が立ち上げの苦労や現状を紹介、食事を交え研修員との和やかな交流の場になりました。夜は各農家に分宿、畳に布団の生活を体験しました。

中国でも農家民宿はブームですが料理提供が中心で、生活体験のような取り組みはまだこれからです。今回の研修が各地で農家民宿の新たなスタイルを考えるきっかけになればと期待しています。

成果・評価

研修員から、印象深かった点、参考になった点を聞きました。共通していたのは、日本のトキ保護の取り組みの緻密さや計画的、体系的な取り組みスタイル、国、県、市、民間の連携協力体制が整っている、トキは住民にとって負担ではなく誇り、保護とトキ活用がうまくバランスされている といった点でした。

また、洋島の研修員からは、有機産業は生産者と消費者の利益のバランスが重要とのコメントもありました。

1週間の研修は、日ごろ交流の少ない各機関の研修員の相互の交流、また、現場入りが困難な地域の関係者とプロジェクトとの意思疎通の場としても大変よい機会になりました。また、今回の訪問中に石川県の関係者との間で、今後のトキ絵画交流についても協議する機会がありました。

研修成果が、今後の中国での保護や地域づくりに活用されることを期待したいと思います。

なお、今回の研修中、佐渡と石川県訪問の様子はNHK(関東甲信越)や新聞各紙地方版で紹介されました。

トキが放鳥された董寨で 環境教育展開中



2013年10月、河南省の董寨国家級自然保護区で陝西省以外では初めてとなるトキの放鳥が実施されました。野外に放たれたトキにとって、野生下で生き残れるかどうかは安定した生息環境の確保にかかっています。

この放鳥に合わせ、董寨保護区とプロジェクトが協力して新聞やテレビ、ポスターの張り出しなど、様々な方法でトキを宣伝してきました。それでもまだ、周辺地域ではトキという名前を聞いたことがない住民も少なくないのが現実です。トキは人と共生する鳥であり、トキ保護には地元住民の協力が欠かせません。

そのためトキの放鳥以降、保護区の職員とトキプロジェクトは普及啓発活動を実施してきました。トキが生息している地域の小学校や農家を訪問し、トキのポスターや冊子、文房具などの広報ツールを活用しながら地域の住民にトキの説明をしました。小学校では、トキ絵本の読み聞かせやトキ絵画教室な

どの活動にも取り組み、これまで延べ13校の小学校で環境教育活動を実施しました。

2014年6月11日に行われた活動では、董寨保護区の潘局長と朱副局長がプロジェクト平野専門家と共に董寨の白馬小学校を訪問し、1～3年生を対象にモデル授業を実施しました。潘局長自らトキについて講義を行い、先生が絵本「トキを見つけたよ」、「トキのカー太」を読み聞かせました。最初はトキの字（キの漢字）も読めなかった児童たちも、授業が終わるころにはトキについて詳しくなってきた様子です。最後はみんなで「トキを守り、ふるさとを守りたい」と誓言しました。

このような普及啓発活動を継続的に実施することにより、地元地域の住民のトキや自然環境保全への意識を高めることが期待されます。自然豊かな董寨における人とトキの共生を望んでいます。



左：保安小学校での環境教育活動（2014年5月）
右：万河小学校での環境教育活動（2014年10月）

日中韓トキ保護シンポジウム

2014年11月11日に浙江省徳清県にて「日中韓トキ保護シンポジウム」開催されました。

シンポジウムでは日中韓の代表者、研究者による最新の各国のトキ現状及び課題の発表がありました。

シンポジウム開催後、中国南部地域における初のトキの放鳥式典が開催されました。

シンポジウム、放鳥式典とどちらもとても、よいムードにて行われ、希少動物保護に関わる関係者の熱意を感じる事ができました。

今回のシンポジウムを契機とし、より一層の日中韓の連携したトキ保護事業の取り組みが期待されます。



董寨の放鳥トキ 初の繁殖成功

トキ野生復帰の取り組みが進められている河南省董寨で、昨年秋に放鳥されたトキの繁殖が確認され、1羽のトキが巣立ちました。今回の繁殖は、中国国内において放鳥されたトキが野外で

繁殖したものとしては、陝西省外では初めてのものです。

4月に営巣、抱卵していることが確認されたこのペアでは、保護区の職員が毎日観察を続け、相次いで2羽のヒナが誕生したことが確認されました。途中から観察されるヒナは1羽となりましたが、保護区やプロジェクトが協力して、識別のための足環も装着されました。順調に育ったこの1羽は、5月下旬に巣の横の枝を歩いて巣立ちを迎え、その後は巣の周辺で親子の3羽が行動する様子なども観察されました。

2014年8月には2回目となる放鳥も行われ、トキが董寨に定着していくことが期待されています。

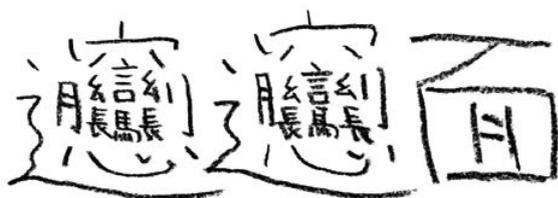
写真：巣でメスの親鳥に餌をねだる幼鳥とオスの親鳥(手前)(2014年5月)

中島専門家帰国

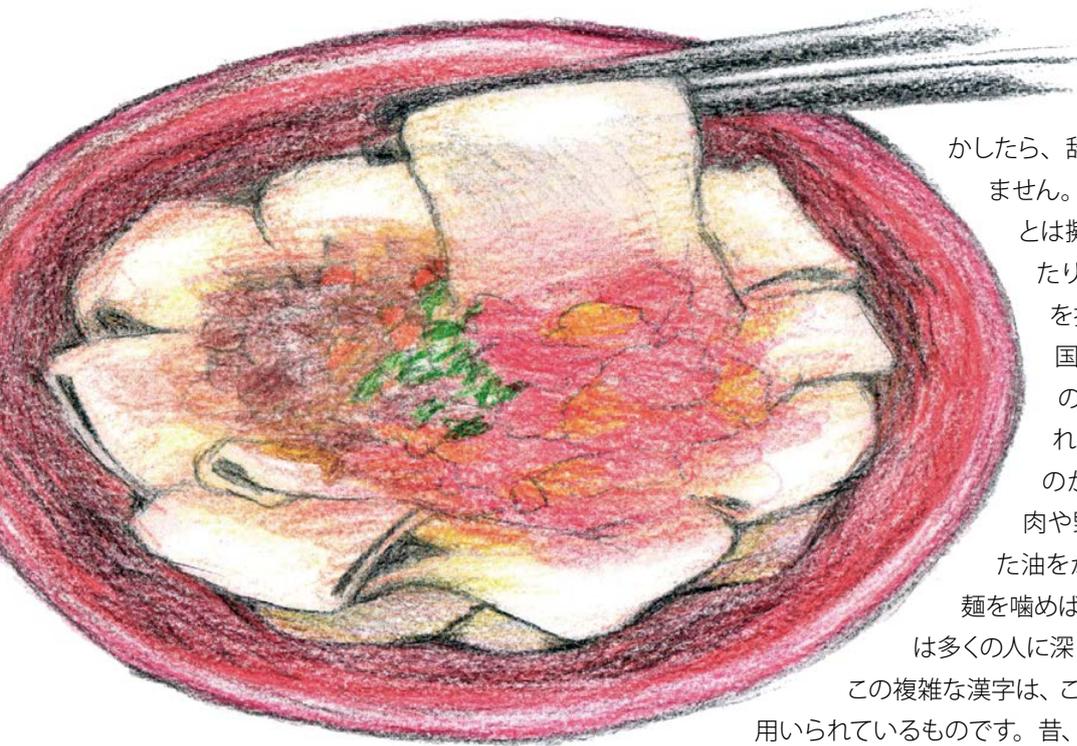
2012年8月より鳥類保護/普及分野の専門家としてプロジェクトに派遣され、この度9月に帰国しました。この2年余りで、河南省で初めてとなる順化訓練や放鳥なども行われ、野外でトキの飛ぶ姿が見られるようになったほか、わずかずつではあるものの、地域でトキへの認識を高めるための取り組みが行われるようになるなど、保護区や関係者の尽力もあってトキの野生復帰が進んできたと言えるのではないのでしょうか。

必ずしも容易に進むことばかりではなかった中国での活動を行うことができたのも、現地カウンターパートの方々をはじめ、JICA事務所やプロジェクトのスタッフ、専門家の皆さまのご協力を頂くことができたからと考えています。この場をお借りして御礼申し上げます。





bianbian 麵



こんなにも複雑な漢字を見たことがありますか？ もしかしたら、辞書にも載っていないかもしれません。この漢字の読み方「ビャン」とは擬音語で、麵をこねたり伸ばしたりするときにつづかってくる音を指し、「ビャンビャン麵」は中国の陝西省における伝統的な麵の一つです。この麵は手で作られ、ベルトのように長くて幅広いのが特徴です。茹でた麵の上に肉や野菜の具を乗せ、最後に熱した油をかけてでき上がり！つるつるな麵を噛めばコシがあって美味しく、地元では多くの人に深く愛されています。

この複雑な漢字は、このビャンビャン麵の名前にだけ用いられているものです。昔、ひとりの貧乏な書生がお腹がすいてこの麵を食べ、食事代のかわりに自分の知っているすべての字を組み合わせで名付けたと言われています。

XianCool



9月11日に一橋大学経済学部グローバル・リーダーズプログラムの実施する中国短期海外調査にて、中川間夫先生及びゼミの学生10名がトキ情報コーナーを訪問しました。トキと住民との関係や、トキブランドの農産物の全国展開の様子等熱心に質疑応答する様子が印象的でした。その後、JICA 専門家と共に陝西省野生動物救護保護センターを訪問し、100羽以上のトキを見学したほか、珍しいブラウンパンダを見学し、次の訪問地である上海に旅立ちました。

人とトキが共生できる地域環境づくりプロジェクト

西安市蓮湖区労働南路 296 号民航大厦 14F
TEL/FAX: +86-(0)29-88793312
微博 e.weibo.com/hitototoki

日本側担当者：平野貴寛
中国側担当者：劉冬平

お断り

本誌は、プロジェクトの近況や情報を率直に読者に伝えることを目的としており、国際協力機構（JICA）の意見を代表するものではありません。